

参加型公園の利用実態と合意形成過程からみたデザインプロセスの評価に関する一考察*

The Evaluation of Design Process from Management Condition and Decision Making Process of Participatory Parks *

野村亮介**・柴田久***・石橋知也****

By Ryosuke NOMURA**・Hisashi SHIBATA***・Tomoya ISHIBASHI****

1. はじめに

今日、公共空間整備に対する住民参加の重要性が法的にも明確化され、利用者である住民の意見を反映させることの意義が広く認識されている。しかし、事業推進を第一とし、合意形成自体を目的とした形骸的な参加事業の存在も既に指摘されている¹⁾。本来、参加のデザインが目指す効果として、利用者の意識や行動の把握とともに、参加プロセスを介すことで対象空間への愛着や住民間のネットワーク化ならびにコミュニティ形成の促進が位置づけられる。つまり、参加に対し、単なる説明責任や住民意見の反映という観点からでなく、成果として生み出される景観や空間とそれに携わるコミュニティの質がいかに向かうかが問われるべきものと考えられる。

これに対し先行研究として、福井らは景観整備事業における効果の整理分類と利用者及び住民の評価軸抽出を行い、景観整備事業がもたらす効果について事業種別に考察している²⁾。また柴田らは合意形成プロセスと完成した空間デザインの質的事後評価から住民参加型事業の課題について分析・考察を行っている³⁾。参加プロセスで想定されていた理念や空間利用が整備後の利用実態と一致しているかは、参加プロセスの有効性・妥当性を評価するうえで極めて重要な観点といえる。しかし、未だ住民参加型事業を対象とした事後評価の研究蓄積は浅く、参加のプロセスを踏まえた供用後の空間利用の実態について詳細に検証したものは希少である。

よって本稿では参考文献3)の継続研究として、住民参加で計画案が作成され、かつ既に供用されている公園整備事業を対象にその利用実態を明らかにする。さらにそれら利用実態と計画内容との整合に着目した合意形成プロセスの事後評価から、参加によるデザインプロセスの評価軸について考察することを目的とする。

*キーワード：住民参加、公園、利用実態、デザインプロセス、評価軸

**学生員，福岡大学大学院工学研究科建設工学専攻

(福岡市城南区七隈8丁目19-1, TD074021@cis.fukuoka-u.ac.jp

TEL092-871-6631(6484), FAX092-865-6031)

***正員，博士(工)，福岡大学工学部社会デザイン工学科

****正員，修士(工)，福岡大学工学部社会デザイン工学科

2. 福岡市住民参加型13公園を対象とした利用実態調査

(1) 調査概要

本調査では、①現地での利用者を対象とした聞き取り、②トレーシングペーパーを用いた動線・利用空間把握、③時間帯別利用人数の集計を行っている(表-1)。ここでは上述したように、参加の手法を用いて計画かつ竣工した福岡市における13公園を対象とする(表-2)。なお対象公園それぞれの立地条件、整備に至る経緯、ワークショップ(以下、WS)における合意形成手法ならびに各公園のデザインサーヴェイについては上記参考文献3)の知見を参照し、分析を進める。

(2) 分析手順

本研究では、各公園の利用実態と参加プロセスにおける合意形成過程との比較・考察を試みるが、前述した②動線・利用空間把握では、調査公園の実施設設計図面にトレーシングペーパーを重ね、利用者の動線を赤色、利用空間の範囲を青色で示した。また、トレーシングペーパーは1時間毎に交換した。聞き取り調査の項目を表-3に示す。本聞き取り調査では、質問紙を用意し、公園利用者ごとにその場で記入してもらった形式をとった。有効回答数は147であり、被験者属性として、性別は男性34%

表-1 調査概要

項目	概要
調査対象公園	福岡市の参加型13公園
調査期間	2006年10月2日～11月17日
調査時間	平日:11～18時の内6時間 土日:11～18時の内2時間
調査方法	①現地での利用者を対象とした聞き取り(147名) ②トレーシングペーパーを用いた動線・利用空間把握 ③時間帯別利用人数の集計

表-2 調査対象公園

公園名	種別	完成年度	整備内容
A公園	街区	H12年度	新設
B公園	街区	H12年度	再整備
C公園	街区	H13年度	再整備
D公園	街区	H13年度	再整備
E公園	街区	H13年度	再整備
F公園	街区	H13年度	再整備
G公園	街区	H14年度	再整備
H公園	街区	H14年度	新設
I公園	街区	H15年度	再整備
J公園	近隣	H15年度	再整備
K公園	街区	H16年度	新設
L公園	街区	H16年度	新設
M公園	街区	H16年度	再整備

表-3 聞き取り項目

被験者属性
性別・年齢・職業
調査公園利用状況
利用頻度・利用目的 一緒に来たことある人 滞在時間
WSの認知 (WS参加者は感想・意見)
住民参加で作られたことを 知っているか 住民参加WSの参加の有無 (参加者→WS・整備後の公園へ の感想・意見)
構造物に対する意見
調査公園に必要な・不要なもの 調査公園で好き・嫌いな場所
被験者の公園に対する満足度
満足～不満までの5段階評価

女性66%で、職業は主婦が52%、就業者が39%、年齢では30代が48%と最も多く、次いで20代が19%、40代が17%であった。

3. 利用実態と合意形成過程の比較考察

ここでは紙幅の関係から、A、C、G、H、I、Jの6公園に対する考察結果を述べる。まず、参考文献3)より、参加プロセスとして唯一質問紙によるアンケートのみであったA公園について述べる(図-1)。本公園は段差による空間の分節が見られる一方で、各分節された空間を横断する動線が多く見られた(図-2)。動線の重なりが最も密な公園中央の「休憩コーナー」は、公園西側の遊具コーナーと東側広場をつなぐ空間として機能している。しかし、休憩コーナーに設置されている花壇は、現在まで何も植えられておらず、デッドスペースと化している(図-3)。上記参加プロセス時のアンケートでは、維持管理について7割の住民が理解を示しているのに対し、現場の状況から十分な管理がなされているとは言い難い。一方、公園西側の遊具コーナーにおいては、設置されている遊具、ベンチのみならず、併設する植栽柵の段差に着座するなどの利用実態が多く抽出された。これに対し、パーゴラの存在する上記休憩コーナーは、公園に併設された歩道(図-4)と同じ高さにも関わらず、利用頻度は低く、休憩機能が十分に活用されていないことが指摘できよう。

次にC公園についてであるが(図-5)、四隅の出入り口を起点とし、南北に繋がる動線が多く把握された(図-6)。さらにそれら動線は「遊びの広場」におけるコンビネーション遊具周辺で交錯していることが分かる。またグラウンドにおける利用空間の範囲は広く、「遊びの広場」では砂場周辺で小規模の利用が散見される。しかし、WSにおいて住民のくつろぎスペース、花見等の催し物やレクリエーション等を念頭に設置された芝生広場は、子供数人の通過に利用が留まっている。一方C公園は文献3)より、参加プロセスにおいて当初、公園北側に隣接する神社との連続性を重視していたにもかかわらず、面積のより広い北側にグラウンド、南側に遊具等のある遊びの広場を配置し、神社境内との間に高さ3mのフェンスを設置した経緯を持つ(図-7)。しかし、利用実態調査から、北側グラウンドにおける利用空間の範囲は南側の広場とほぼ同等であり、公園利用者の多くは南側広場に多いことが看取された。本公園WSでは、想定される利用行動の範囲に関する議論は見られず、公園北側へのグラウンド配置によってフェンスがたてられたことから、結果的に神社と公園との繋がりを阻害する空間構成を招いたものと解釈できる。さらに、公園への進入は北側入口がほとんどであり、北側グラウンドを通過して南側広場へ移動する動線も多く把握された。

加えて本公園の出入り口の一部分には、山積みのゴミが見受けられ(図-8)、調査期間中にもゴミの量が漸増しており、ゴミ捨て場と化している。本公園は準工業地域に区分され、昼時にはサラリーマンやOLといった就業者の利用が多く把握された一方で、上記ゴミ捨て場にゴミを放置していく光景も見受けられた。このことから、公園管理の意識の低さが利用者のモラル悪化を助長することも指摘できよう。WS中、「公園に対する愛着を高め、公園をより大切に」との目標が設定されていたのに対し、維持管理の不足と利用者行動を想定できなかったことが参加の意志決定プロセスの課題として抽出できる。

次にG公園であるが(図-9)、細長い三角形の敷地形状を持つ本公園においては、園内の入り口を拠点として公園中央部に向かう動線が多く、一方公園の両端部は比較的動線が少ないことが看取できる(図-10)。公園

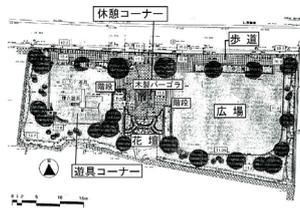


図-1 A公園実施設計図面

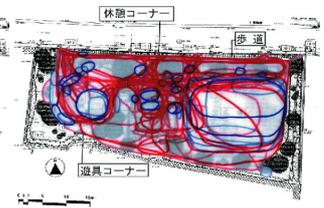


図-2 A公園利用実態



図-3 無管理の花壇



図-4 併設された歩道



図-5 C公園実施設計図面

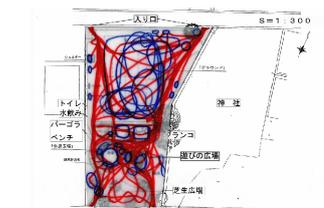


図-6 C公園利用実態



図-7 神社との境界部



図-8 山積みのゴミ

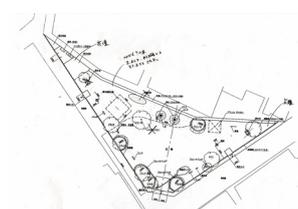


図-9 G公園実施設計図面

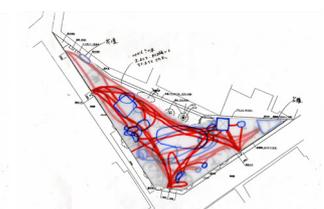


図-10 G公園利用実態

両端部において動線が少ないことの原因として、日常的には利用されない花壇や物置が設置されているためと考えられる。WS中、整備後の公園に対する関わり方として花壇作りや清掃等の公園の維持管理に関する意見が出されており、公園の清掃は月に1回地域住民によって行われている。しかし、現在、花壇の手入れを行っているのは町内会長婦人のみであることが本聞き取り調査から把握された(図-11)。また、本公園には再整備以前から柿の木が設置されているものの、実地調査より、落下した柿の腐乱とカラスによる食い散らしが多く見られた(図-12)。WS中、一部の班から「柿があると汚れる恐れがある」との意見も出ており、公園管理に対する検討の不十分さが伺える。

次にH公園であるが(図-13)、本公園は弾性舗装の園路を境に南北に分かれた利用が伺え(図-14)、北側の芝生広場では軽い運動や休憩・おしゃべり等の静的行動、一方南側のカメ型遊具を有する広場では遊具遊びや砂場遊びなどが見られた。また、芝生広場付近の外周フェンスは0.7mと低いものが設置されている(図-15)。WS時では「芝生広場になだらかな勾配をつけ、野球等の運動空間として利用しにくい」空間利用を敢えて想定し、低フェンス設置が合意されている。利用実態として芝生広場で静的行動が多数見受けられたことから、上記想定した利用者行動との整合が確認される。さらに結果的に低フェンスによって芝生広場の圧迫感が軽減され、開放的で落ち着ける空間となっている。一方、カメ型遊具周辺では子供を見守る保護者の姿が多く見受けられたが、「子供が遊ぶのを見守りながら休憩できる」という目的で設置されたパーゴラベンチはほとんど利用されていない(図-16)。現地でも話を聞いたところ、パーゴラベンチは背面に車道があるため落ち着けないことに加え、カメ型遊具により公園全体が見通せないため利用しないとのことだった。パーゴラベンチの利用が少ないことに対し周辺のベンチは利用されていることから、公園内の休憩スペースをデザインするうえで利用者の安心感を担保する「見通し」の重要性が挙げられる。またWSにおいて「ベンチの位置を決めるのは、手がかりが何もない計画地では大変」との意見もあり、上記見通しの考慮も含め、住民が整備後の公園像を想定することの難しさが伺えよう。

次にI公園であるが(図-17)、本公園は多目的ゾーン(多ゾーン)、花と憩いのゾーン(花ゾーン)、老人と子供のふれあいゾーン(ふゾーン)、敷地外周と中央のジョギング散策路から形成されており、多ゾーンではボール遊び、花ゾーンでは木陰での休憩、ふゾーンでは遊具遊び、ジョギング散策路では移動や回遊といった行動が見られた。I公園の本聞き取り調査では、「ボール遊びを思い切りできるように」「ボールが道路に転がる」といった広場利用者側からのフェンス必要の2意見が抽出されたのみ

で、他のゾーン利用者側からは広場境界面に対するフェンス必要の意見は抽出されなかった。さらに図-18より、多ゾーンにおける空間利用はゾーン内にほぼ収まる程度の行動範囲であったことから、多ゾーンと花ゾーンの境界に敷かれている散策路には視覚的にエリア境界線を認識させ(図-19)、ボール遊び等で他の利用者に迷惑をかけないように広場での動的な活動範囲を抑止する機能があると考えられる。また利用実態調査から、ゾーン間で交錯した動線と利用空間の点が見られ、さらに本聞き取り調査から「見通しがよく、広くてよい」との意見が複数抽出された。本公園ではWSにおいて「それぞれのゾーン間や施設間は見通しよく、行き来を妨げないような関



図-11 管理された花壇



図-12 腐乱・散乱した柿

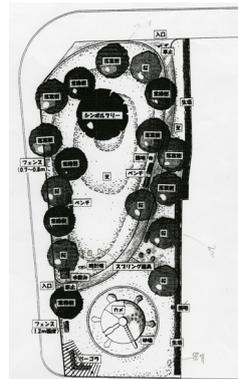


図-13 H公園実施設計図面

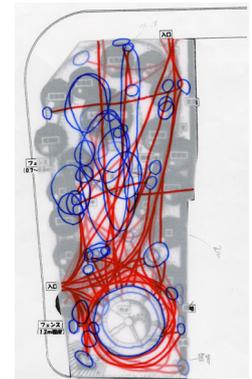


図-14 H公園利用実態



図-15 外周の低フェンス



図-16 パーゴラベンチ

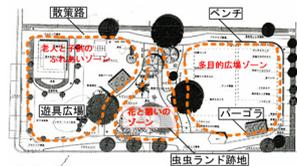


図-17 I公園実施設計図面

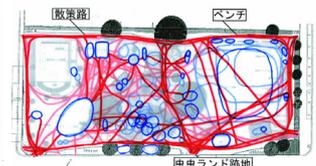


図-18 I公園利用実態



図-19 多ゾーンと散策路

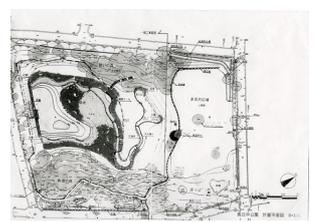


図-20 J公園実施設計図面

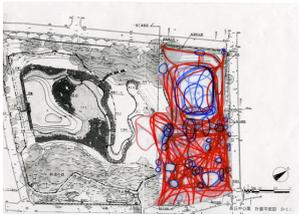


図-21 J公園利用実態



図-22 J公園の見通し

連性を持たせた空間構成とする」というゾーニングプランが見られ、参加プロセスで話し合われた利用者行動の想定が実態と整合していることを示唆している。

次にJ公園であるが(図-20)、本公園はフェンスや斜面に囲まれた多目的広場、自然色の木製遊具が設置された遊具広場、池・湿地・森等の自然が残された空間の3つのエリアから構成されている。現在、池等を有する自然空間は立ち入り禁止になっており利用は見られないが、遊具広場では多くの動線が交錯し、多目的広場では野球等の動的行動が見受けられる(図-21)。本公園では、地形による高低差とそれを活かした見通しの良さが指摘できるが(図-22)、これは、WSにおいて見通しについての議論が多く行われたこと、模型を複数用いて3次元での検討を行ったことの成果であると推察される。また本公園は、三年間にわたる全6ラウンド計23回のWSを行った公園であり、その成果として、住民による自主的な維持管理組織が結成され、現在も活動している。他の公園では多かった「ゴミが多い」等の公園管理上の不満意見は本公園の聞き取り調査では得られなかった。

4. 参加型公園の利用実態と合意形成過程からみた デザインプロセスの評価軸について

ここでは調査結果から参加型公園の利用実態と合意形成過程からみたデザインプロセスの評価軸について考察を試みる。

第一に、デッドスペース化した花壇を持つA公園や山積みゴミが見られたC公園、花壇や落下した柿が放置されたG公園等、WS時に合意を得られていても整備後に維持管理のなされていない公園が多く見受けられた。その一方で、J公園のように住民主体の維持管理が継続して行われている公園も把握されている。アンケートのみの参加手法が取られたA公園と長期に渡り多くのWSを行ったJ公園の比較から、住民主体の維持管理には住民間のネットワーク作りに繋がる参加の手法が有効であると推察される。また、WS時において整備後の維持管理について、住民主体の管理体制に関わる具体的な課題を十分理解することが、合意形成時の重要なポイントと言えよう。さらにそのような管理体制を整えていく過程にこそ、住民間のコミュニティ形成に繋がる可能性が見出されるものと考えられる。

第二に、H公園で見られた利用の少ないベンチ、反対にJ公園の地形の高低差を活かした多様な空間利用な

ど、利用実態における「見通し」の重要性が伺えた。また本聞き取り調査から「暑くて長時間居づらい」という意見も多数抽出され、日陰の変化など休憩が主目的となりうる広場のデザインにおいては時間的な空間変化を十分考慮すべきと考えられる。しかし、これら時間的・空間変化や「見通し」等の観点は、WSや本聞き取り調査においても住民には想定しにくく、これに関する意見も少ないことが明らかとなった。前述した見通しの良さが把握されたJ公園では模型による検討が行われ、見通しの悪さが指摘された新設のH公園では模型等での検討は行われていない。さらに新設4公園ではいずれの公園でも模型等を用いた議論はなされていない。このことから専門家と利用住民との対話において、特に整備後の公園像を想定しにくい新設公園の整備にとって、3次元での検討は重要なスタディ・プロセスと言えよう。

第三に、C公園でのフェンスによって阻害された隣接神社との空間的つながりやI公園における利用者行動の想定による効果的ゾーニングなど、想定される行動とそれに基づく施設の配置に対する十分な検討が挙げられる。本調査結果においては、H公園の参加プロセスにおいて、公園の広さに見合った利用者の行動が想定されたことで、公園外周に設置されるフェンスの高さが下がり、結果的に開放感のある広場空間が創出されている。しかし、前述したC公園のようにフェンス等の施設導入によって逆にこれまで展開されていた行動が失われたケースも看取された。すなわち、住民意見から容易に想定がなされる行動に基づき、すぐさまフェンス等の直接的なハード対策やゾーニングを講じるのではなく、まずは想定された行動自体を再考する対話プロセスの重要性が指摘できる。本来、住民参加によって、より良いデザイン提案を目指した利用者の意識や行動の質的変容が効果として得られなければならない、それらを促す双方向かつ発展的なスパイラルのプロセスが参加の評価軸として重視される必要があるだろう。

補注・参考文献

- 1) 齋藤潮、土肥真人編著：環境と都市のデザイン—表層を超える試み・参加と景観の交点から—、学芸出版社、2004
- 2) 福井恒明・安藤義宗・兼子和彦：利用者のコメントに基づく景観整備効果の分析、景観・デザイン研究講演集、No 2、pp147-154、2006.12
- 3) 柴田久・西原敬人：合意形成プロセスと完成した空間デザインの質的事後評価にみる住民参加型整備事業の課題に関する考察—福岡市における参加型13公園を事例として—、土木計画学研究・講演集Vol33、論文No223、2006.6